ふるさとの誇り

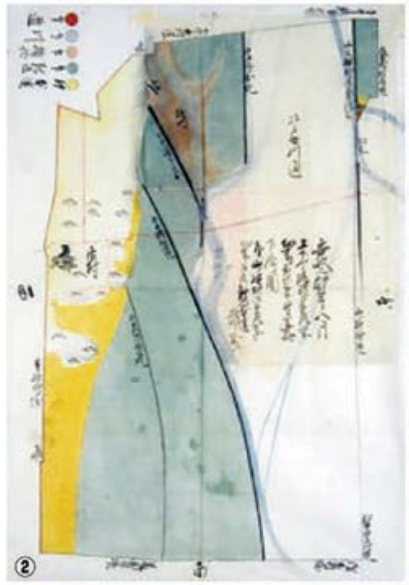
其の18

【南アルプス市を守った堤防】（上）

南アルプス市の南半分をまもった水防の要（かなめ）「将監堤（しょうげんてい）」

①将監堤

もともとの将監堤は、写真中央に見える取水口付近まででしたが、その後、その向こうにみえる現在の釜無川大橋の南側、浅原地区との境にまで延長されました。



②鏡中条村堤防絵図（南アルプス市蔵）

安政２（1773）年に描かれたこの図面によって、鏡中条村には将監堤以外にも、二ノ出堤、八幡下堤（通称もようげん堤）、内将監堤などが配置され、二重三重の構えで地域を水害から守っていたことがわかります。

③水害図（鏡中条　長遠寺蔵）

享和２（1802）年に将監堤が決壊した様子を描いた絵図です。江戸～明治時代に度々決壊した監堤ですが、ここが決壊するとその被害は、釜無川西岸一円にひろがり、甲西地区の東半分を飲み込んだ後、鰍沢にまで達することがわかります。

釜無川を渡る鏡中条橋。川を越えて西に進むと、道はまたすぐ次の堤防を乗り越えます。この堤防が釜無川治水の要の一つ「将監堤」です。

将監堤の名前の由来ははっきりとはわかりませんが、若草地区鏡中条の長遠寺に残る「水害図」によれば、この堤防が決壊すると被害は甲西地区を中心とする釜無川西岸地域一円に広がり、まさにここを守ることが、釜無川の治水の要であったことがわかります。

将監堤に関することは、地域の重大な関心事であったため、現在この堤防に関する古文書が市内に数多く残されています。地域に残る古文書で、この堤防は必ずといっていいほど「将監堤之儀ハ水下十三ケ村、御高一万石余御囲堤ニテ御座候（将監堤は、その下流13か村、およそ1万石の耕地を守る堤防です）」という書き出しで登場し、将監堤の役割がいかに重要であったかがわかります。

13か村は、鏡中条、藤田、戸田、宮沢、大師、荊沢、田島、西南湖、和泉、東南湖、大椚、青柳、鰍沢の各村と考えられ、現在の若草地区、甲西地区、及び南巨摩郡増穂町、鰍沢町に及びます。

江戸時代後期、これら13か村の石高の合計は、実際には9千石余。同時期、現在南アルプス市を構成する村々の石高の合計は3万石弱ですので、将監堤が守った耕地の大きさがわかります。

将監堤は、旧鏡中条村の堤防ですが、江戸時代には、この13か村の内、鏡中条、藤田、戸田、西南湖、和泉、東南湖の6か村が「水防組合」を結成してこの堤防を守っていました。

現在は釜無川大橋もその上を通り、普段何気なく通り過ぎてしまう堤防ですが、昔から市内の南半分を水害から守ってきた、わたしたちの先祖の汗と涙の結晶といえるのです。

次回は、南アルプス市の北半分を守った有野村の堤防です。